

自他交替における動詞の形態と Causer の生起に関する検討

キーワード 自他交替 原因 動作主 分散形態論 機能範疇

竹本 理美 (淑徳大学)

■ 問題の所在

本発表では、(1) の下線部のような動詞が表す事態の引き起こし手となる原因を表す要素 (以下、Causer) と自他交替に関わる形態との相互関係について、記述的観察を踏まえ、分散形態論の枠組みからの分析を検討する。

- (1) a. 洗濯物が風で乾いた。 b. 風が洗濯物を乾かした。

Causer は、動作主 (Agent) と同様に他動詞文の主語位置に生起し得る一方で、その生起に制限が生じることが知られている。この制限には他動化形態の違いが関与しており、具体的には-s-や-as-を含む他動詞 (例: (2a)「乾かす」) の主語には Causer が生起可能な一方で、-ø-や-e-を含む他動詞 (例: (2b)「植える」) の主語には生起できないと指摘されている (影山 1996, 大関 2021)。

- (2) a. 風が洗濯物を乾かした。(cf. 太郎が洗濯物を乾かした。)
b. *風がタンポポを畑に植えた。(cf. 太郎がタンポポを畑に植えた。)

このような観察を踏まえて、新山・竹本 (2023) は、Causer を導入する機能範疇 CAUS (cf. Alexiadou et al. 2006, 2015) を仮定し、CAUS が Causer を導入するか否かという素性の違いが他動化形態を決定することを提案している。

以上のように、他動詞主語の意味役割と他動化形態の関係について、機能範疇を中心とした分析が行われている。一方で、Causer の生起可否が他動詞の形態に関わるとすると、以下の2点が次の課題として浮かび上がる。本発表は、記述的観察を通して、分散形態論の枠組みから分析を試みる。

- 他動詞と対応する自動詞、すなわち非対格動詞では付加詞として Causer が生起し得るが、自動化形態と Causer の生起可否との連動が見られるのか。
- 自他交替を示す動詞において、Causer の生起可否と自動詞・他動詞の形態との関係は分散形態論の枠組みからどのように説明が与えられるか。

■ 非対格動詞における Causer の生起と形態

非対格動詞は対象の変化を表すことから、(3a) のように様々な自動化形態を含む動詞で Causer が付加詞として生起する傾向にある一方で、(3b) のように-ar-

を含む動詞では容認されにくい傾向が観察される。

- (3) a. 洗濯物が風で乾いた。(kawak- $\emptyset$ -u) 鉄塔が強風で倒れた。(tao-re-ru)
じゃがいもの葉が霜で枯れた。(kar-e-ru)
b. *タンポポが風で畑に植わった。(uw-ar-u)
*のれんが風で店の入り口に掛かった。(kak-ar-u)

(3b) のような-ar-を含む動詞は脱使役化動詞 (影山 1996) と呼ばれ、意味的に動作主が含意されている動詞である。動詞が表す事態の引き起こし手が動作主に限定されているために、同じく事態の引き起こし手である Causer の生起が阻害されると考えられる (cf. 竹本 2020)。

上記の観察で得られた、特定の動詞形態と Causer の生起可否の連動は機能範疇 CAUS を仮定することで構造的に捉えられる。Alexiadou et al. (2006, 2015) は、(3a) のように非対格動詞にも Causer が生起することから統語構造にも機能範疇 CAUS が存在すると指摘しており、さらに新山・竹本 (2023) で提案された Causer を導入しない素性を持つ機能範疇 CAUS (CAUS [-Causer]) を仮定することで、機能範疇 CAUS [-Causer] がある場合には、自動化形態として-ar-が現れると分析することが可能である。すなわち、他動詞と同様に、自動詞 (非対格動詞) においても、Causer の生起可否が形態の決定に関与すると提案できる。

■ 自他交替における Causer の生起と形態の相互関係

さらに、対応する自動詞および他動詞間での Causer の生起可否と形態の相互関係についても、機能範疇 CAUS を通して形態統語論的に捉えられる。たとえば、-ar-を含む非対格動詞が Causer を導入しない機能範疇 CAUS [-Causer] を持つと仮定した場合、自動詞および他動詞が共通して構造に CAUS があるとする分析においては、対応する他動詞には [+Causer] の素性を持つ CAUS が現れないと予測される。実際に、-ar-自動詞に対応する他動詞の形態は- $\emptyset$ - (例:「挟まる」(hasam-ar-u)/「挟む」(hasam- $\emptyset$ -u)) や、-e- (例:「植わる」(uw-ar-u)/「植える」(uw-e-ru)) であり、新山・竹本 (2023) において CAUS [+Causer] の場合に具現化すると提案されている他動化形態-s-は現れない。すなわち、Causer の導入に関わる機能範疇 CAUS の素性によって、自動詞および他動詞の形態における選択関係が捉えられると言える。

■ 結論

以上から、本発表の結論は以下の2点となる。

- Causer の生起可否は、他動詞だけでなく、自動詞（非対格動詞）においてもその形態決定に関与する。
- Causer の生起可否と自動化形態との関係、さらに自動詞および他動詞間の形態との関係は、機能範疇 CAUS の素性によって説明が与えられる。

参考文献

- Alexiadou, Artemis, Elena Anagnostopoulou, & Florian Schäfer. 2006. The properties of anticausatives crosslinguistically. Mara Frascarelli (ed.) *Phases of Interpretation*. 187-213. Mouton.
- Alexiadou, Artemis, Elena Anagnostopoulou, & Florian Schäfer. 2015. *External Arguments in Transitivity Alternations: A Layering Approach*. Oxford University Press.
- 影山太郎. 1996. 『動詞意味論—言語と認知の接点—』くろしお出版.
- 新山聖也・竹本理美. 2023. 機能範疇 CAUS による他動詞の形態統語論的分析—他動化辞-s-と-Ø-の対立を中心に. 『KLS Selected Papers 5』65-79.
- 大関洋平. 2021. 分散形態論と日本語の他動性交替. 岸本秀樹（編）『レキシコン研究の現代的課題』1-23. くろしお出版.
- 竹本理美. 2020. Causer の生起に関する一考察. 『言語学論叢』39, 32-45.

語彙的複合動詞の自他交替：音形と意味の自律的挿入

田中 秀治（名古屋大学）

キーワード：分散形態論・語根・動詞化要素・項導入・音形挿入

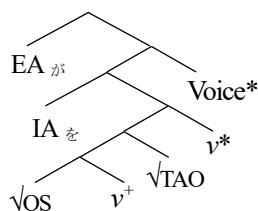
【論点】 影山 (1993) 以来「語彙的複合動詞」と呼ばれる V_1 - V_2 は、 V_2 が自他交替できる動詞でも、(1b) のように V_1 が他動詞だと基本的には V_2 を自動詞にできない。ただし、影山自身も含め様々な研究者が言うように、(1d) のような可能な例も存在する。

- (1) a. 健が 自分の手で レバーを 押し倒した c. 健が 自分の手で レバーを 押し上げた
b. *ボタンを 押すと レバーが 押し倒れた d. ボタンを 押すと レバーが 押し上がった

では、なぜ (1d) は「可能」なのか？この点は、陳・松本 (2018) がコンストラクション形態論の立場からフレーム意味論を使って、洞察に富む分析を提案している。概略、彼らは「押し上がった」を「使役事象の非使役化」の例として扱い、「 V_2 の結果から V_1 の様態が推論でき、その結果状態が視覚的に明確であればあるほど V_2 が自動詞化しやすくなる」としている。しかし、その分析自体は参考に値するが、そうすると (1b) も V_2 を自動詞化できそうなのに、それが「不可能」なのはなぜか？意味的に見ると、例えば Fukushima (2016) が提案するように V_1 - V_2 の意味関係に対しては「限界性 (telicity) の調和制約」があるが、(1b) はそれにも違反していない。本稿では、その「押し倒れた」の悪さに着目して、その例を Embick & Marantz (2008) など分散形態論の立場から「意味的には可能だが、形態的には不可能な V_1 - V_2 」であると主張する。

【提案】 まず、語彙的 V-V の統語構造としては田中 (2024, 2025) の案 (2) を使う。

(2) 「EA が IA を押し倒す」の動詞句構造 (EA = 外項・IA = 内項)



この案は、 v^+ という動詞化要素が 2 つの語根 $\sqrt{\quad}$ を意味的に合成する機能を持ち、2 つの語根に構造的に挟まれないとその意味が挿入されないと仮定している。よって、影山 (1993) が指摘したように V_1 の位置に「名詞+する」などの「語根ではない句表現」が置けないという事実は、その意味挿入の構造条件から導ける。

ここで重要なのは、 v^+ の役割が「2 つの語根の意味合成」と「連用語尾 [i] の挿入位置」に限られているという点である。つまり、実際に外項・内項を導入するのは、Kratzer (1996)、Basilico (2008) に従って Voice、 v などの動詞形態素 (v_m と表記) と考え、項を導入できるタイプの v_m には Voice*、 v^* のように * を付すことにする。以上の仮定に

基づき、本稿では「各動詞の語根に挿入される音形は、その語根を局所的に C 統御する $\sqrt{m^*}$ の数で決まる」と提案する。これは Harley (2014) の「語根を含めどの形態素も、その音形と意味は生起する統語環境を参照しながらそれぞれ形態音韻部門と意味部門で挿入される」という考えに合う提案で、例えば、「押す」「倒す」「倒れる」という動詞の語根はそれぞれ (3) の 3 行目に示す音形挿入の構造条件を持つと仮定する。

- | | | |
|---|--|---|
| (3) a. EA が IA を押す | b. EA が IA を倒す | c. IA が倒れる |
| 構造 : $[[\sqrt{OS} \nu^*] \text{Voice}^*]$ | 構造 : $[[\sqrt{TAO} \nu^*] \text{Voice}^*]$ | 構造 : $[[\sqrt{TAO} \nu^*] \text{Voice}]$ |
| $\sqrt{OS} \leftrightarrow [\text{os}] / [[_ \sqrt{m^*}] \nu^*]$ | $\sqrt{TAO} \leftrightarrow [\text{taos}] / [[_ \sqrt{m^*}] \nu^*]$ | $\sqrt{TAO} \leftrightarrow [\text{taore}] / [[_ \sqrt{m^*}] \nu^*]$ |

要は、「押す」「倒す」は 2 つの $\sqrt{m^*}$ と、「倒れる」は 1 つの $\sqrt{m^*}$ と共起した時の音形ということである。よって、(1b) の「押し倒れる」という音形を得るには、まず $\sqrt{OS}$ が (2) のような構造に入る必要があるが、それだと $\sqrt{TAO}$ が 2 つの $\sqrt{m^*}$ に C 統御されてしまうので、[taore] という自動詞形が得られないことを正しく説明できる。

【予測】 以上の提案は、(1d) の「押し上がる」が可能であるという事実も予測できる。まず、「上げる・上がる」の語根は (4) の音形挿入の条件を持つと考えられる。

- | | |
|--|---|
| (4) a. 健が ^{EA} 元位置に ^{GA} レバーを ^{IA} 上げた | b. 元位置に ^{GA} レバーが ^{IA} 上がった |
| 構造 : $[[[\sqrt{AG} \nu^*] \text{Appl}^*] \text{Voice}^*]$ | 構造 : $[[[\sqrt{AG} \nu^*] \text{Appl}^*] \text{Voice}]$ |
| $\sqrt{AG} \leftrightarrow [\text{age}] / [[[_ \sqrt{m^*}] \nu^*] \nu^*]$ | $\sqrt{AG} \leftrightarrow [\text{agar}] / [[_ \sqrt{m^*}] \nu^*]$ |

つまり、「上げる・上がる」はどちらも目標項 (GA) を求める動詞であるため、その GA は Pytkänen (2002) の Appl* という動詞形態素が導入するとしよう。すると、「押し上げる・押し上がる」という音形を得るには、 $\sqrt{OS}$ と $\sqrt{AG}$ が (5a)・(5b) の構造に入る必要があるが、どちらでも $\sqrt{OS}$ は 2 つ (以上) の $\sqrt{m^*}$ と共起しており、特に (5b) では $\sqrt{AG}$ も 2 つの $\sqrt{m^*}$ としか共起してないので、[agar] という自動詞形が得られる。

- | | |
|--|--|
| (5) a. EA が GA に IA を 押し上げる | b. GA に IA が 押し上がる |
| 構造 : $[[[[\sqrt{OS} \nu^+] \sqrt{AG}] \nu^*] \text{Appl}^*] \text{Voice}^*]$ | 構造 : $[[[[\sqrt{OS} \nu^+] \sqrt{AG}] \nu^*] \text{Appl}^*] \text{Voice}]$ |

【拡張】 以上のように、本稿では (1b) の「押し倒れる」を「意味的には可能だが、形態的には不可能な V_1 - V_2 」として分析することを提案した。この分析の妥当性をさらに示すためにあと 2 つのことを行う。まず、本分析が「 V_2 の自他交替が可能な他の例」である「突き刺す・突き刺さる」や「積み重ねる・積み重なる」などにどう適用

できるかを検討する。次に、「V₂だけでなく V₁ も自他交替が可能な例」を見ると、「染め上げる・染め上がる・染まり上がる・*染まり上げる」や「折り曲げる・折り曲がる・折れ曲がる・*折れ曲げる」(cf. 前田 2022) のように「V₁ が自動詞・V₂ が他動詞」の例は他と比べて不自然となるが、その事実もどう説明できるかを検討する。

参考文献

- Basilico, David. 2008. Particle verbs and benefactive double objects in English: High and low attachments. *Natural Language and Linguistic Theory* 26, 731–773.
- 陳奕廷・松本曜. 2018. 『日本語語彙的複合動詞の意味と体系：コンストラクション形態論とフレーム意味論』. 東京：ひつじ書房.
- Embick, David, and Alec Marantz. 2008. Architecture and blocking. *Linguistic Inquiry* 39, 1–53.
- Fukushima, Kazuhiko. 2016. Telicity makes or breaks verb serialization. *MMM10 Online Proceedings*, 55–63.
- Harley, Heidi. 2014. On the identity of roots. *Theoretical Linguistics* 40, 225–276.
- 影山太郎. 1993. 『文法と語形成』 東京：ひつじ書房.
- Kratzer, Angelika. 1996. Severing the external argument from its verb. In *Phrase structure and the lexicon*, eds. Johan Rooryck, and Laurie Zaring, 109–137. Dordrecht: Kluwer.
- 前田宏太郎. 2022. 「V-V 型複合動詞の自他交替：形態-統語のミスマッチの観点から」, 『信州大学総合人間科学研究』 第 16 号, 109–124.
- Pylkkänen, Liina. 2002. *Introducing arguments*, Doctoral dissertation, Massachusetts Institute of Technology, Cambridge.
- 田中秀治. 2024. 「分散形態論と語彙的 V-V 複合語の意味構成」, 『レキシコン研究の新視点：統語・語用と語の意味の関わり』, 岸本秀樹・日高俊夫・工藤和也 (編), 292–316. 東京：開拓社.
- 田中秀治. 2025. 「語彙的複合動詞と連濁の有無：分散形態論からのアプローチ」口頭発表, 日本言語学会第 170 回大会, 明海大学, 2025 年 6 月 28 日.

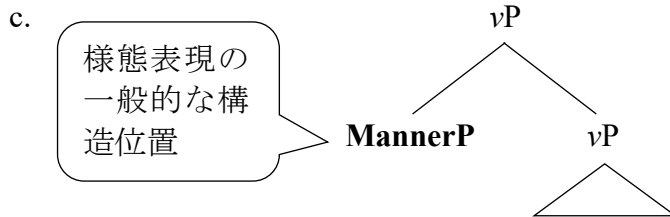
義務的に生起する様態表現について

キーワード：義務的様態表現，付加詞，動詞補部

森山倭成（関西外国語大学）

【問題の所在と主張】一般に，様態表現は，その生起が随意的である。そのため，統語論研究では，(1)c のように，vP に付加されると考えられることが多い。

- (1) a. 太郎は (ゆっくり) 歩いた。 b. 太郎は (丁重に) 謝罪した。



本論では，一般的な見方に反して，様態表現が動詞によって要求される場合があることを指摘する。具体的には，(2)a にリストする動詞が**義務的に様態付加詞を補部**に取ることを論じる。3つの根拠に基づき，このことを示す。

- (2) a. 振る舞う，立ち (居) 振る舞う，する，やる，立ち回る，扱う



【根拠1：生起の義務性と付加詞性】まず，(2) の動詞は，様態表現を義務的に要求する。

- (3) a. ジョンは *(お行儀よく/明るく/堂々と) (立ち(居)) 振る舞った。
b. 太郎は *(おとなしく/お行儀よく) した。
c. 太郎はどんな状況でも *(うまく/上手に/適当に) やっている。
d. 太郎は職場で *(上手に/うまく) 立ち回った。
e. ジョンはバイトの子を *(丁重に/大事に/雑に) 扱った。

義務的様態表現は，動詞により要求されるものの，項ではなく付加詞である。「*太郎は本を雑誌を読んだ」のように，項の多重生起は容認されない一方で，「太郎はゆっくりのんびりと走った」のように，付加詞の多重生起は可能である (Carnie 2021)。義務的様態表現を用いて多重生起の可否を確かめると，(4) のように，複数の様態表現が同時に生起できることから付加詞の性質が確認できる。

- (4) a. 太郎は行儀よく明るく振る舞った。 b. 太郎は行儀よく大人しくした。

【根拠 2：動詞句擬似分裂文】次に、動詞句擬似分裂文を用いて、 νP 付加部より下位の構造位置に義務的様態表現が基底生成されることを示す。動詞句擬似分裂文では、焦点部の「こと」句に νP が埋め込まれる (Nakayama and Koizumi 1991; Koizumi 1994; 岸本 2016)。(5)a では、焦点部に「皿を洗う」という動詞句が現れている。(5)b のように、動詞補部に生起する「皿を」は、焦点部に現れることができるが、前提節に生起することはできない。一方で、(5)c のように、 νP に付加される様態句は、前提節と焦点部の両方に生起できる。

(5) a. 太郎が e したのは [νP 皿を洗う] ことだ。

b. 太郎が (*皿を) したのは [νP (皿を) 洗う] ことだ。

c. 太郎が (丁寧に) したのは [νP (丁寧に) 皿を洗う] ことだ。

このことを念頭に置いて、義務的様態表現の振る舞いを確認すると、(6) のように、(5)b と同じ結果が得られる。 νP 付加詞（「丁寧に」）ではなく「皿を」と同じ分布を示すので、義務的様態表現の構造位置は νP 付加部より下位である。

(6) a. 太郎が (*明るく) したのは [νP (明るく) 振る舞う] ことだ。

b. 太郎が (*おとなしく) したのは [νP (おとなしく) する] ことだ。

【根拠 3：摘出可能性】最後に、摘出可能性に関するデータから、義務的様態表現が動詞の補部に生起することを示す。Huang (1982) の摘出領域条件 (CED) に基づくと、要素の摘出は、適正に統率される領域からのみに限定される。(7) は、適正統率を受けない付加部からの摘出が起こっており、CED に違反している。

(7) *[花子が t_i *pro* 言ったように] 次郎がピアノをうまく弾けるのは私に $_i$ だ。

義務的様態表現を用いて CED 効果の有無を確認すると、(8) のように、当該の効果は検出されない。このことは、義務的様態表現が適正に統率される構造位置に存在することを示唆している。根拠 2 と合わせて考えると、義務的様態表現は、動詞が適正に統率する VP の補部に基底生成されるといえる。

(8) a. 太郎が [t_i 背くように] 振る舞ったのは親の期待に $_i$ だ。

b. 太郎が [t_i 行きたそうに] したのは海外旅行に $_i$ だ。

【まとめ】まとめると、根拠 1 は、様態表現が、動詞が義務的に要求する付加詞であることを、根拠 2・3 は、様態表現が動詞補部に基底生成されることを示唆している。これまでの一般的な見方では、様態表現は、 νP に付加されるとみなされてきた。本論の観察は、一部の様態付加詞が動詞補部に基底生成されること

を示している点で、様態表現についての見方の再考を促すものである。

【参照文献】

Carnie, Andrew. 2021. *Syntax: A Generative Introduction, Fourth Edition*. Wiley-Blackwell.

Huang, C.-T. James. 1982. Logical relations in Chinese and the theory of grammar. Doctoral dissertation, Massachusetts Institute of Technology, Cambridge.

岸本秀樹. 2016. 「文の構造と格関係」村杉恵子・斎藤衛・宮本陽一・瀧田健介 (編)『日本語文法ハンドブック：言語理論と言語獲得の観点から』102–145. 東京：開拓社.

Koizumi, Masatoshi. 1994. Secondary predicates. *Journal of East Asian Linguistics* 3, 25-79.

Nakayama, Mineharu and Masatoshi Koizumi. 1991. Remarks on Japanese subjects. *Lingua* 85, 303-319.

Xed out 構文からみる「生産性」と「創造性」

キーワード：Xed out 構文、生産性、創造性、抽象化、コンストラクティコン

阿部明子（和光大学）

本発表で扱うのは、「Xed out 構文」あるいは「exhaustive 構文」と呼ばれる、以下のような構文である。(1)、(2)は Jackendoff (2002: 188)による。

(1) a. I'm (all) knitted/programmed out.

(編み物/プログラミングをしすぎて、うんざりしている。)

b. I'm (all) coffeed out.

(コーヒーを飲みすぎて、うんざりしている。)

(2) 基本構造：[_{AP} V/N + -d + [_{Prt} out]]

意味："worn out from too much V-ing/too much N"

述部は、コピュラ動詞の後に、V または N に-(e)d が付いた AP として現れ、不変化詞の out を伴う。この構文は、対象となる N や V が示す行為に話者が過度にさらされる (over-exposure) ことによって、倦怠や疲労などを感じているさまをあらわす。Jackendoff はこの Xed out 構文が完全に生産的 (totally productive) であり、「構文」の枠に入れられることによって N が動詞的な意味をもつようになる」と述べている。しかし、実際の使用例を観察すると、V や N の範疇にとどまらず、より多彩な語彙項目が X のスロットに入っており、構造における自由度がより高まっていることが明らかになってきている。

Hugou (2013: 83)は、X のスロットを「最大限に開かれたスロット」(a maximally open slot) とみなし、無限に多様な語彙項目が入りうると述べている。また、Zehentner (2025)も、英語のニュースサイトを収録する大規模モニターコーパスである NOW コーパスを用いて、実在する様々な用例を分析している。両者が示す例は、いわゆる規則だけでは説明できないものも多い。たとえば、Hugou は次のような例を挙げている。

(3) a. < Xに入る不規則動詞をあえて-ed 形に> writed out, thought out

b. <句全体が X に入り、ed が out のほうに付加> cat chasing outed

c. <形容詞が X に入る> cuted out, happier out

d. <機能語が X に入る> iffed out (仮定の話を考えすぎて疲れてしまう)

Xed out 構文はその時々、社会的・文化的な話題を取り込みながら、新たな表

現を生み出し続けていると考えられ、筆者による Google 検索においても、次のような例は比較的容易にみつけることができる。

- (4) a. <有名なアーティスト名が X に入る> Taylor Swifted out
- b. <有名なアーティストのファンを表す語 Swiftie が X に入る>
Swiftied out (熱心なファンやテイラー・スウィフトの話題にうんざり)
- c. <SNS の媒体の名が X に入る> TikToked out

本発表では、新たなデータを加え、Xed out 構文の形式と意味の対応について議論し、いかにしてこの構文が豊かな生産性を発揮し、さらには、規則からの逸脱をも含めた、いわゆる創造性を示すことが可能となっているのかを考察したい。

しかし、ここで重要なのは、そもそも何をもって構文が「生産的」であるとするのか、また「創造的」であるとするのか、そして「逸脱」とはどのような現象なのかを、あらかじめ整理して議論することである。この点は、先行研究を読み解くうえでも留意すべきである。たとえば、Hugou (2013)と Zehentner (2025)は、いずれも Xed out 構文の「生産性」(productivity)の高さを論じているが、両者が指す「生産性」の内容は同一ではない。Hugou は、Bauer (1983)を踏まえ、生産性を「新たな表現がどの程度規則的かつ予測可能な形で形成されるか」ととらえているのに対し、Zehentner は「構文全体がどの程度多様な語彙項目を受け入れられるか」ととらえている。

生産性と創造性(creativity)の関係についても、両者の立場は異なる。Hugou は生産性と創造性を連続体とみなすのに対し、Zehentner は両者を区別し、出現頻度を重視せず、構文の力によって既存の用法から一時的に逸脱して新しい表現を作り出す能力を「創造性」と呼んでいる。この違いは重要な論点である。

本発表の構文拡張の考え方は、Jackendoff (2002)の並列構造(Parallel Architecture)における統語構造・概念構造・音韻構造とのインターフェイスや、Goldberg (2019)が唱えた形式的・意味的な類似性、およびスキーマとの関連につながるものである。

人間が構文を獲得し、新たな表現を作り出すメカニズム、そして、抽象化された構文知識がどのように蓄えられているのかを究明することは重要な課題である。本発表では、その手がかりとして、Xed out 構文の拡張例をもとに、構文の「生産性」と「創造性」に関する理論を整理することを目指す。あわせて、

Jackendoff、Goldberg の流れをくむ研究に通底する、コンストラクティコンの理論（Goldberg 2003; Hilpert 2014 参照）を視野に入れた分析を検討していきたい。

< 参考文献一覧 >

Bauer, Laurie (1983) *English Word-Formation*. Cambridge: Cambridge University Press.

Goldberg, Adele E. (2003) “Constructions: A New Theoretical Approach to Language,” *Trends in Cognitive Sciences* 7(5), 219-224.

Goldberg, Adele E. (2019) *Explain Me This: Creativity, Competition, and the Partial Productivity of Constructions*. Princeton and Oxford: Princeton University Press.

Hilpert, Martin (2014) *Construction Grammar and Its Application to English*. Edinburgh: Edinburgh University Press.

Hugou, Vincent (2013) “The Xed out Construction: Between Productivity and Creativity,” *Quaderns de Filologia: Estudis Lingüístics* 18, 83-95.

Jackendoff, Ray (2002) *Foundations of Language*. Oxford: Oxford University Press.

Zehentner, Eva (2025) “I’m all virtual-peopled out: Creativity and productivity in the case of the English ‘exhaustive’ construction,” *Functions of Language* 32(1), 43-73.

言語の可変可能性と文法拡張の仕組み

—統語論と形態論の接点—

稲田俊明(九州大学名誉教授)

人間に備わった言語機能を解明しようとする生成文法研究にとって、言語の普遍的特性の探究と同時に、言語間変異や個別言語内の特殊構文の特性など、言語の可変可能性の探究も重要な課題である。本講演では、生成文法の言語設計の課題となる特殊構文の事例を検討して、統語論と形態論の接点になり得る問題を探り、試案を提示したい。

1. 問題と主張: 生成文法の“標準的な”言語設計にとって、構造と意味が最適に合致していない複合表現（一種の“特殊構文”）をどう説明するかが課題になる。そのような特殊構文の存在を、単に周辺的で例外的な問題と見做すのではなく、「どのような言語モデルを仮定すれば原理的に説明できるのか」を探り、特殊構文の派生を可能にするためには次の議論が重要であると主張する: (1) 基本構造に基づいて派生構造を構築する文法拡張の仕組みがあり、それを組み込んだ言語習得モデルを仮定する必要がある。(2) 基本構造を生成する UG に加えて、言語固有ではない知覚的要因が派生構造の生成に関わっている。

2. 生成文法の言語設計と特殊構文の生成: まず、生成文法が想定する言語モデルを概観して、問題となる特殊構文の派生がその射程内にあるかどうかを確認する。生成文法は、人間に内蔵された「言語知識」(の探究)であるが、それが言語固有の豊かな生得的知識であると仮定すれば、「言語獲得の問題」は説明し易くなるが、「言語進化の問題」に近づくことができない (Chomsky (2000, 2005, 2023))。MP は、それ以前に想定していた (i)「生得的な言語知識」と(ii)「言語経験」に加えて、(iii) (言語固有ではない)「第三要因 (The Third Factor)」を重視し、UG を必要最小限にする試みである。MP の指針は、言語知識も自然界の存在物として完璧である (“The logically simple is also the real.”) と見做すという観点からは利点があるが、言語の「可変可能性の問題」(i.e. 特殊構文や変種の派生の仕組み)は、周辺的な問題になるというジレンマが残る。他方、「第三要因」を重視するという指針は、それに言語固有ではない知覚や一般的認知機能も含まれ、言語変異や文法拡張においてもその要因が重要な役割を持つと考えれば、言語理論研究の射程が広がる。

3. 特殊な複合表現の合成: 構造と意味の対応関係にズレがある複合表現では、どのように構成要素を合成して構造を構築するかが課題になる。例えば、語形成においては、形態構造と意味が対応しない場合、規則適用の順序や「構成性の原理」の違反が問題になる (例えば、long-haired, kinder-hearted, etc. は、意味的には $[_A [_A + N]-ed]$ の構造が望ましいことは、[blue-blood]-ed, [pigeon-heart]-ed, etc.のような慣用句が示している; 構造的にも, $[_A [_A \text{ kinder}]]-[_A \text{ hearted}]]$ (cf. well-intentioned)のような合成はできない)。

同様に、次のような特殊な複合表現にも、構造と意味の対応にズレがあり問題になる。

- (1) a. 富士山がよく見えるように木を伐採したのは、すぐ裏にあるホテル関係者である。
b. 大手スーパーに設置されているコイン精米機利用者数は、昨年同期の1割増だった。
- (2) a. 殺傷能力のある武器輸出解禁により、小泉防衛大臣はフィリピンで売り込みを開始した。
b. 法改正の目玉は、外国勢力によるスパイ活動を取り締まるスパイ活動防止法導入である。
また、稲田 (1988, 2022)では、次のような非対称的な等位接続の問題を議論した(等位接続された2つの等位項[A&B]のうち、後者は単独または逆順では生起できない)。
- (3) a. She wondered $[_{CP} \text{ what there was for dinner that night}]$ and $[_{NP} \text{ the kind of mood that her father would be in}]$. (Jespersen 1949)
b. It looks $[_{AP} \text{ like there really was a pattern in the terrorism bombings and street violence}]$ and $[_{CP} \text{ that it was a coordinated, planned and executed thing}]$. (WH 1973)

このような特殊構文の派生構造を可能にする要因として (A)「等価類の統合」と、(B)言語固有ではない「知覚的第三要因」が関わることを示したい。特に、基本構造から“逸脱しているように見える特殊構文の構造について、その派生の仕組みを検討して、文法の可変可能性を自然に説明できる文法拡張の仕組みを提示したい。また、関連した先行研究を概観して、Pafel (2015), Trips & Kornfilt (2015)等の類型論的に異なる諸言語の句複合化についての考察と提案されている主張の問題点を指摘する。

4. まとめと今後の課題

(A) 本発表で検討した特殊構文が、実際に資料に多く観察され生産性が高いことを示し、(B) それが単なる例外ではなく、基本構文に基づいて規則的に派生される「文法拡張」であると主張し、(C) そのような文法拡張は、言語習得の初期状態ではなく、“個別言語の途中段階の特性が次の可能性を決定する仕組み”に還元できることを示したい。検討課題は、MP のテーゼは「言語は、言語外から課される条件を最適に満たす(もの)」であるが、「最適解」は一通りではない。本発表で提案する派生構造は、複数の主要部を統合して階層構造を減らすので、言語運用における文処理のコストを軽減して“最適化”している。従って、文法の最適化とは何かについても、再検討の余地がある。

参考文献

- Chomsky, N. (2000) Minimalist Inquiries: The Framework. In R. Martin et al. (eds.) *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*. MIT Press.
- Chomsky, N. (2005) Three Factors in Language Design, *Linguistic Inquiry* 36.
- Chomsky, N. (2021) Minimalism: Where Are We Now, and Where Can We Hope to Go, *Gengo Kenkyu* 160.
- Halle, M. and A. Marantz (1993) “Distributed Morphology and the Pieces of Inflection,” Hale K. and J. Keyser (ed.) *The View from Building 20*. MIT press.
- Harley, H. (2009) Compounding in distributed morphology, in Lieber R. and P. Stekauer (eds.) *The Oxford Handbook of Compounding*, Oxford.
- Jespersen, O. (1949) *A Modern English Grammar on Historical Principles*, Part II-IV. George Allen and Unwin.
- Kajita, M. (1977) Towards a Dynamic Model of Syntax, *Studies in English Linguistics* 5, Asahi Press.
- Kajita, M. (2002) A Dynamic Approach to Linguistic Variations, in Kato, Y. (ed.) *Proceedings of the Sophia Symposium on Negation*.
- Komatsu (Fujiwara), C. (2003) Phrasal compounds: A study based on English, Japanese and Mandarin Chinese data, in Chiba et al. (eds.) *Empirical and Theoretical Investigations into Language: A Festschrift for Masaru Kajita*, Kaitakusha.
- Lieber, R. (1992) *Deconstructing Morphology, Word-Formation in Syntactic Theory*, University of Chicago Press.
- Pafel, J. (2015) Phrasal compounds and the morphology–syntax relation, in Trips, C and J. Kornfilt (eds.) Ch. 8.
- Trips, C and J. Kornfilt (eds.) (2015) *Further Investigations into the Nature of Phrasal Compounding*, Language Science Press.
- 稲田俊明 (2022) 「文生成の仕組みと文法拡張—「置換操作」を組み込んだ文法モデル—」 科研費による言語学研究会、長崎大学.
- 稲田俊明 (2023) 「動的な文法理論と言語獲得モデル」 日本第二言語習得学会 J-SLA 研修会、中京大学 7 月.
- 大関洋平・漆原朗子 (2023) 『分散形態論の新展開』 開拓社.
- 乙黒亮・田川拓海 (2024) 『形態論の諸相』 くろしお出版.
- 梶田 優 (2004) 「<周辺><例外>は周辺・例外か (特集 <周辺><例外>の魅力—そこから見えてくるもの)」, 『日本語文法』 4 (2)、日本語文法学会.

例文出典

- WH (1973) = *The Watergate Hearings: Break-in and Cover-up*, Proceedings of the Senate Select Committee on Presidential Campaign Activities as edited by the staff of the New York Times.

消去を用いない融合の分析——英語 be を例に

岡村 康平（和歌山工業高等専門学校）

キーワード：分散形態論、融合 (syncretism)、消去 (impoverishment)、数素性
パラダイムセルの融合 (syncretism) に対する分散形態論の分析においては、不完全指定 (underspecification) と 消去 (impoverishment) はその中心的存在である。完全指定をとる場合、より多くの消去が必要になる。

- (1) 英語の $\sqrt{\text{be}}$ の語彙項目 (Frampton (2002: 208) より乙黒・田川 (2024: 56) に従い改変)
- a. $\sqrt{\text{be}} \leftrightarrow \text{was} / ______ [-\text{pl}, +\text{past}]$
b. $\sqrt{\text{be}} \leftrightarrow \text{were} / ______ [+past]$
- (2) 消去の規則 (注 1)
- a. $[-\text{pl}] \rightarrow \emptyset / ______ [\text{prs}:2]$

しかし、本稿では、Frampton (2002: 210) が指摘するゲルマン語に典型的な 1-3 人称の融合は、動詞の二人称の単複の融合による副次的なものにすぎず、かつ当該融合は殆どの場合で代名詞における二人称の単複が見られることから、二人称代名詞の代名詞 *you* は、必然的に [2nd] の素性しか持たず、消去を用いなくとも、(1b) の規則が正しく適用されることを主張する。

Ackema and Neeleman (2013: 914) は、単数・複数いずれの解釈も取りうるオランダ語の敬称 *U* を主語にとる定形動詞が、必ず単数の屈折語形を取ることを指摘し、消去規則を適用するか、その代わりに語彙項目の素性を削減するかを検討した。結果、彼らは (4) の消去規則に基づいて、(5) の語彙項目を立てたが、後に Ackema and Neeleman (2018: 45) は、どちらの立場に対しても中立な立場を取った。一方、英語の *be* 動詞においては、後者が適切である。

- (3) a. *U heeft natuurlijk alle vijf/allebei de troonrede gehoord.*
You.hon has of.course all five/both the throne-speech heard
‘Of course, you will all five of you/both have heard the queen’s speech.’
b.**U hebben natuurlijk alle vijf/allebei de troonrede gehoord.*
You.hon have-pl of.course all five.of.you/both the throne-speech heard
- (4) $[\text{pl}] \rightarrow \emptyset / [\varphi ______ \text{hon}]$
- (5) $[\text{prox dist hon}] \Leftrightarrow /u/ / [\text{D} ______]$

第一に、この分析の必然性が通時的に導かれうるものであることを示す。

- (6) 二人称代名詞のパラダイムの変遷
- a. 中英語 (Wright and Wright (1923: 153-154))

格	単数	複数
主格	<i>þu, þou</i>	<i>3e (3ee, ye(e), 3he, yhe</i> とも綴る。OE <i>gē</i> より)
対格・与格	<i>þe</i>	<i>3ou, 3ow</i> (OE <i>ēow</i> より)

b. 初期近代英語 (Sweet (1892: 101-102))

格	単数	複数
主格	thou	ye (のち you も主格に用いられる)
目的格	thee	you

c. 現代英語 (Sweet (1892: 102))

格	単数	複数
主格	you	you
目的格	you	you

(7) 動詞の屈折語形の変遷

a. 中英語 (Wright and Wright (1923: 175, 192-193)) 現在は東中部、過去は中部の値を代表として採る (注 2)

bīnden	現在 sg	現在 pl	bīnden	過去 sg	過去 pl
1	bīnde	bīnden	1	band (bond)	bounden
2	bīndest	bīnden	2	bounde	bounden
3	bīndep, -es	bīnden	3	band (bond)	bounden
be	現在 sg	現在 pl	be	過去 sg	過去 pl
1	am	are(n), arn	1	was	weren (wāren)
2	art	are(n), arn	2	were (wāre)	weren (wāren)
3	is	are(n), arn	3	was	weren (wāren)

b. 初期近代英語 (Sweet (1892: 155-156, 189-190))

see	現在 sg	現在 pl	see	過去 sg	過去 pl
1	see	see	1	saw	saw
2	seest	see	2	saw(e)st	saw
3	seeth, sees	see	3	saw	saw
be	現在 sg	現在 pl	be	過去 sg	過去 pl
1	am (be)	are (be)	1	was	were
2	art (beest)	are (be)	2	wast, wert	were
3	is	are (be)	3	was	were

c. 現代英語

see	現在 sg	現在 pl	see	過去 sg	過去 pl
1	see	see	1	saw	saw
2	see	see	2	saw	saw
3	sees	see	3	saw	saw
be	現在 sg	現在 pl	be	過去 sg	過去 pl
1	am	are	1	was	were
2	are	are	2	were	were
3	is	are	3	was	were

これらから、少なくとも英語の be 動詞については、二人称単数に固有の屈折形が存在するか否かが、代名詞の側で数が指定されているかとは歴史的に一種の相関性があることがわかる。第二に、この相関が英語に限られないことを示す。Siewierska (2004) と Cysouw (2003) で挙げられる諸言語のうち、二人称代名詞が単複同形であるものについて、定形動詞の一致を分析した。その結果、19 言語 (Slavic 9、Romance 1、Indic 1、Afro-Asiatic 2、Uralic 3、Turkic 3) では、いずれも定形動詞は単数の解釈でも 2pl 形をとり、数を区別しない。また、同

様の記述は Slavic について Corbett (2000: 194) にもある。反例は 1 例、Kiowa である。Watkins (1984: 100) は ”There are only two personal pronouns, neither of which is distinguished for number or gender” と述べるが、intransitive prefixes は 2sg èm, 2du mà, 2pl bà と 3 つに区分する (Watkins (1984: 115))。ただしこの 19 言語はすべて敬称に関連するものであり、英語の you のように同一言語内で数を区別する二人称代名詞をもたないものではなかった点で、本節が示すのは、代名詞の側で数が指定されないとき定形動詞もまた数を標示しないという相関が、英語に固有でないという点に留まる。なお、定形動詞に限ったのは、分詞・述語形容詞まで含めると単数一致が現れるためである (Vous êtes loyal 対 loyaux。Ackema and Neeleman (2018: 47))。この分岐は mixed agreement と呼ばれ、semantic agreement として扱われる (Wechsler and Hahm (2011))。

注 1: (2) では、二人称単数の場合にのみ形態素 [-pl, +past] から [-pl] を消去することで、**You was* を回避し、[+past] となった形態素に対応する (1b) が正しく選択される

注 2: 現在時制の 2sg は南部・ケント bintst / 東中部 bīndest / 西中部 bīndes(t) / 北部 bindes。現在時制の複数 は南部・ケント bīndeþ / 東中部・西中部 bīnden / 北部 bindes。北部欄では現在の 2sg・3sg・複数がいずれも bindes で同一語形、過去の 1sg・2sg・3sg がいずれも band で同一語形。

参考文献

- Ackema, Peter and Ad Neeleman (2013) “Person Features and Syncretism,” *Natural Language & Linguistic Theory* 31(4), 901-950. / Ackema, Peter and Ad Neeleman (2018) *Features of Person: From the Inventory of Persons to Their Morphological Realization* (Linguistic Inquiry Monographs 78), MIT Press, Cambridge, MA. / Comrie, Bernard (1975) “Polite Plurals and Predicate Agreement,” *Language* 51(2), 406-418. / Corbett, Greville G. (2000) *Number* (Cambridge Textbooks in Linguistics), Cambridge University Press, Cambridge. / Corbett, Greville G. (2006) *Agreement* (Cambridge Textbooks in Linguistics), Cambridge University Press, Cambridge. / Cysouw, Michael (2003) *The Paradigmatic Structure of Person Marking* (Oxford Studies in Typology and Linguistic Theory), Oxford University Press, Oxford. / Frampton, John (2002) “Syncretism, Impoverishment, and the Structure of Person Features,” In Mary Andronis, Erin Debenport, Anne Pycha and Keiko Yoshimura (eds.) *CLS 38: The Main Session, Papers from the 38th Meeting of the Chicago Linguistic Society*, 207-222, Chicago Linguistic Society, Chicago. / Siewierska, Anna (2004) *Person* (Cambridge Textbooks in Linguistics), Cambridge University Press, Cambridge. / Sweet, Henry (1892) *A Short Historical English Grammar*, Clarendon Press, Oxford. / Watkins, Laurel J. (1984) *A Grammar of Kiowa* (Studies in the Anthropology of North American Indians), University of Nebraska Press, Lincoln and London. / Wechsler, Stephen and Hyun-Jong Hahm (2011) “Polite Plurals and Adjective Agreement,” *Morphology* 21(2), 247-281. / Wright, Joseph and Elizabeth Mary Wright (1923) *An Elementary Middle English Grammar*, Humphrey Milford, Oxford University Press, London. / 乙黒亮・田川拓海 (2024) 『形態論の諸相 —6 つの現象と 2 つの理論—』 くろしお出版, 東京.

日本語の名詞句削除と名詞句内 Focus 主要部としての「の」：文法化の観点から

中村 直樹（九州大学）

Keywords: 名詞句削除, CP–DP parallelism, Cartography, 名詞句内 FocusP, 文法化

1. はじめに

日本語の名詞句削除をめぐっては、主に二つの分析が提案されてきた。第一は「削除分析」であり、属格要素と D^0 との間で Spec-head agreement が成立することにより、補部以下の削除が認可される(例:ローマの破壊は京都~~の破壊~~よりも悲惨だった。(Saito and Murasugi [S&M] (1990); cf. Lobeck (1995)))。第二は「代名詞化分析」であり、主要部名詞が軽名詞として機能する「の」によって置き換えられる(例:恋愛にも地味な~~の~~と派手な~~の~~がある。(Hiraiwa (2016: 1357)))。

一方、S&M (1990), Saito et al. (2008), Watanabe (2010)は、「の」には、主要部名詞と数詞・名詞修飾要素とを結びつける「連結要素 (Linker/Modification Marker)」としての機能もあることを指摘しており、このタイプは、名詞句削除を認可しないことが知られている(例:*最近~~は~~晴れ~~の~~日が雨~~の~~__よりも多い。(S&M(1990)))。

本発表では、本来は削除を認可しない Linker としての「の」が、例外的に名詞句削除を認可する現象を取り上げ、その認可のメカニズムを明らかにする。

2. 観察と問い

次のような比較文脈におけるやり取りを想定してみよう。

[文脈]: 太郎と花子が花屋でどの(イベント用の)花を選ぶか相談をしている。

太郎: イベントだから赤っぽいお花がいいと思うけどどう?

花子: んー、赤のお花は華やかでいいと思うけど、今度のイベントは梅雨の時期だし、まじめな会だから、(1)青のがいいと思う。

(1)において、「青のがいい」は文脈上「青の花の方がいい」という解釈が可能である。¹また、同様の解釈で、「青の花~~の~~がいい。/青い花~~の~~がいい。」という発話も可能である。²「青の花の方」で使われる「の」はどちらも名詞をつなぐ Linker であるといえる。ここで注目すべき点は、Linker の「の」を伴う場合であっても名詞句削除が認可されている点である。従来の分析では、Linker は削除を認可で

¹ ここでの容認性判断は、大学生 48 人と 30 代言語学者 2 人を対象に行った調査の結果に基づき、結果はすべての人が容認できる解釈であると回答した。言語学者の一人は、意図した解釈で「青のがいい」と発話することはないだろうが、聞いた場合には当該解釈が可能と回答した。

² 「青いのがいい」は比較解釈にはならず、「の」は軽名詞として「青い花」を指すといえる。

きないため(例：雨の日→*雨の__)これらの例において何が削除を認可するのか
が問題となる。また、(2), (3)のような削除は構成素の観点からも難しい。

(2) *[[青の花]の方] がいい。

(3) *[[青の花]の方] がいい。

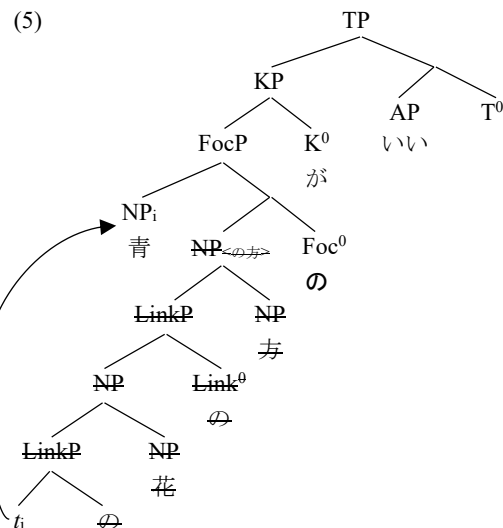
(3)については「方」を音声化されない Semi-lexical category とみなすことも可能
だろうが、「*[[青い]φ]が いい」が許されないことからこの分析は採用できない。

同様の例は、コーパスや web サイト、YouTube 等でも観察される。例えば、
『日本語日常会話コーパス』では「あなたの臭い(くさい)よね、私のがいい匂い」
という発話が記録されている。³以上を踏まえ、本発表では以下の問いを立てる。

(4) Linker に見える「の」が伴う名詞句削除は、どのように認可されるのか。

3. 提案

本発表では、CP-DP parallelism (Abney
(1987), Chomsky(1970))のもと CP 領域の
Cartography(Rizzi (1997), Cruschina (2011))
を名詞句領域に拡張し、名詞句内部にも
FocusP が存在するという立場を取る
(Corver and van Koppen (2011)等)。具体的
には、「青のがいい」に現れる「の」は
Linker ではなく、名詞句内 Foc⁰の具現形



であると主張する。「青の花の方がいい」の「青」は、複数の色の候補から選ば
れ、他の候補と対比されることにより焦点解釈を受ける。したがって、当該現象
は(5)のように派生する。すなわち、「青」が[Spec,FocP]へ焦点移動し、Foc⁰との
間で Spec-head agreement が成立することで、Foc⁰の補部の削除が認可される。

これまで、「の」が焦点(化)要素として扱われることは少なかったが、Shimada
and Nagano (2017)は、属格・軽名詞としての「の」が文法化を経て、CPにある
情報焦点(IFoc)主要部として再分析され、Mirative 機能を獲得したと論じている
(例:嫌いなものもたべるの!)。本発表では、この文法化分析を名詞句領域へ拡張
し、一見 Linker にみえる「の」が、名詞句内の機能主要部(Foc⁰)の具現形として
再分析され、その結果、新たに名詞句削除を認可する能力を獲得したと主張する。

³ 早口では「の方」の/h/脱落により/no:/に近く聞こえる例もあるが、YouTube 上の自動字幕検索
サイトからは、当該形式に対応する音声データも複数確認できる([URL](#))。

参照文献

- Abney, S. P. (1987) *The English Noun Phrase in Its Sentential Aspect*, Doctoral dissertation, Massachusetts Institute of Technology, Cambridge, MA.
- Chomsky, N. (1970) “Remarks on Nominalization,” *Readings in English Transformational Grammar*, ed. by Roderick A. Jacobs and Peter S. Rosenbaum, 184–221, Ginn, Waltham, MA.
- Corver, N. and M. van Koppen (2011) “NP-Ellipsis with Adjectival Remnants: A Micro-Comparative Perspective,” *Natural Language and Linguistic Theory* 29(2), 371–421.
- Cruschina, S. (2011) *Discourse-Related Features and Functional Projections*, Oxford University Press, Oxford.
- Hiraiwa, K. (2016) “NP-Ellipsis: A Comparative Syntax of Japanese and Okinawan,” *Natural Language & Linguistic Theory* 34, 1345–1387.
- Lobeck, A. (1995) *Ellipsis: Functional Heads, Licensing, and Identification*, Oxford University Press, New York.
- Rizzi, L. (1997) “The Fine Structure of the Left Periphery,” *Elements of Grammar: A Handbook of Generative Syntax*, ed. by Liliane Haegeman, 281–337, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.
- Saito, M. and Keiko M. (1990) “N'-Deletion in Japanese,” *University of Connecticut Working Papers in Linguistics* 3, 87–107.
- Saito, M., T.-H. J. Lin and K. Murasugi (2008) “N'-Ellipsis and the Structure of Noun Phrases in Chinese and Japanese,” *Journal of East Asian Linguistics* 17, 247–271.
- Shimada, M. and A. Nagano (2017) “Miratives in Japanese: The Rise of Mirative Markers via Grammaticalization,” *Journal of Historical Linguistics* 7(1–2), 213–244.
- Watanabe, A. (2010) “Notes on Nominal Ellipsis and the Nature of *no* and Classifiers in Japanese,” *Journal of East Asian Linguistics* 19, 61–74.
- 国立国語研究所 (2020) 『日本語日常会話コーパス CEJC』.
URL: <https://chunagon.ninjal.ac.jp/> (2026 年 8 月 24 日閲覧).

尺度句と後置詞要素の解釈に基づく後置詞句構造について

(キーワード：前・後置詞、文法化、統語構造)

綾野 誠紀（亜細亜大学）

本研究では、日本語の空間を表す後置詞句の統語構造について検討する。尺度句 (Measure Phrase (MP)) と、空間上の参照点を示す参照物 (Reference Object (RO)) の空間軸上の領域 (Region (REG)) を表す「前」等との語順とその解釈に基づき、REG が後置詞句の派生にいかに関与しているのかを明らかにする。なお、REG は、関係名詞 (Relational Noun (RN)) から派生した後置詞内要素である。(1) に英語の例を示す。(1a) の RN “front” の名詞特性が失われ、(1b) が示すように REG として現れるとその解釈にも差が生じる (Ayano 2001, Svenonius 2006)。

- (1) a. John is sitting in the front of the bus. バスの前方の席に座っている (バス車内)
b. John is sitting in front of the bus. バスの前に座っている (バス車外)

英語同様に (2) の日本語の「前」にも 2 種類の解釈があることから、「前」には RN と REG の異なった語彙項目が存在すると考える。

- (2) ケンがバスの前に座っている (こと) バス車内=(1a) / 車外=(1b)

REG「前」が名詞ではなく、後置詞要素である証拠として、尺度句(MP)との共起が挙げられる。オランダ語や英語では、特定の特性を持つ前置詞のみが MP と共起できることが示されており (Zwarts 1997)、同様の指摘が日本語についてもなされている (Watanabe 2009)。(4) の事実に基づき、バス車外解釈の「前」は、(3b) の“front”と同様、REG の特性を持つと考えられる。

- (3) a. *John is sitting three meters in the front of the bus. * バス車内
b. John is sitting three meters in front of the bus. ✓バス車外

(cf Svenonius 2006)

- (4) ケンがバスの 3 メートル前に座っている (こと) *バス車内 / ✓バス車外

なお、REG「前」は、MP「3 メートル」との語順が固定されており、(5) のように「前」が 3 メートルに先行することはできない (Watanabe 2009)。

- (5) *ケンがバスの前 3 メートルに座っている (こと)

ただし、(6a) で示すように、(5) に「ところ」を挿入すると語順交替が可能である (Watanabe 2009)。また、(6b) の MP>REG の語順では、「ところ」は随意的である。

- (6) a. ケンがバスの前 3 メートルの*(ところ)に座っている (こと)
b. ケンがバスの 3 メートル前の(ところ)に座っている (こと)

さらに、「前」に格助詞が後続しても MP と REG の語順の交替が可能である。

- (7) a. 警察がバスの 5 メートル前を封鎖している (こと)
b. 警察がバスの前 5 メートルを封鎖している (こと)

- (8) a. バスの 5 メートル前が封鎖されている (こと)
b. バスの前 5 メートルが封鎖されている (こと)

ただし、(7) 及び (8) の (a) の語順と (b) の語順では解釈が異なる。(b) はバスの前面か

ら、警察によりバリケードの柵が設置されている 5 メートルの地点までの全領域が対象となるのに対し、(a)はバスの前面から 5 メートルの地点のみが対象となる。なお、(a)も(b)同様の解釈が可能かもしれないが、それは語用論もしくは世界知識に基づく。すなわち、(9a)及び(10a)の全領域解釈は以下に示す後続表現により取消可能であるが、(9b)及び(10b)については取り消すことができない。

(9) a. 警察がバスの 5 メートル前を封鎖している 1 メートル前は立ち入り可

b. 警察がバスの前 5 メートルを封鎖している #1 メートル前は立ち入り可

(10) a. バスの 5 メートル前が封鎖されている 1 メートル前は立ち入り可

b. バスの前 5 メートルが封鎖されている #1 メートル前は立ち入り可

さらに、「ところ」を(9b)と(10b)に挿入すると、バス前面から 5 メートルの地点の解釈となる。

(11) a. 警察がバスの前 5 メートルのところを封鎖している

b. バスの前 5 メートルのところが封鎖されている

以上の事実をまとめると、空間上の参照物 RO「バス」の空間軸上の領域 REG「前」から投射された 5 メートルの地点という限定された場所を表すためには、REG が MP に後続するか、「ところ」の挿入が必須である。(12)に以上の観察をまとめる。

(12) a. 全領域解釈(REG>MP) [RO REG MP]-*/-/が/-を

b. 地点解釈(MP>REG) (i) [RO REG MP]-*(ところ)-/-が/-を

(ii) [RO MP REG]-(ところ)-/-が/-を

以上の事実の説明には、REG の移動分析と「ところ」の意味特性に基づく分析の少なくとも 2 つの可能性がある。まず、移動分析では、(12bi)の地点解釈は REG の移動による。Watanabe (2009)は、「ところ」には 2 種類あると主張する。義務的に顕在化する「ところ」と、随意的に顕在化する「ところ」があり、前者の「ところ」は、REG を含む REGP の「ところ」の指定部への移動を駆動するが、後者は移動を駆動しない。本発表では、移動後の REG は元位置で解釈されるために地点解釈(MP > REG)が得られると仮定する。移動分析に対する基底生成分析では、地点解釈は、MP>REG の語順に加えて、単なる「ところ」の意味特性に基づくと考えることも可能である。つまり、「ところ」は地点解釈の意味特性を有し、(12bi)の「ところ」を伴う地点解釈は、「ところ」が全領域解釈を書き換えた結果であると考えられる。なお、いずれの分析においても、(12a)の全領域解釈(REG>MP)は、REG の基底生成によるものとする。

本研究では移動分析を支持する。Watanabe (2010)における、#主要部と数量詞の一致により認可される削除分析では、#P 内の一致により NP の削除が認可され、削除された NP がさらに Case の指定部に移動する分析の可能性が指摘されている(cf Johnson 2001)。

(13)a. ケンが本 3 冊を買った一方、リナは 2 冊を買った

b. ...[CaseP ~~[NP 本]]_k [PP 2 [t_k [# 冊]]] [Case を]] (Watanabe 2010 に基づく)
 (13)の数量詞を含む名詞句、並びに尺度表現を含む擬似部分構文の統語構造(cf Watanabe 2006)を基に、(14a)の後置詞句の統語構造を(14b)のように提案する。~~

(14)a. ケンが [バスの前 3 メートル*(のところに)] 座っている

b. [[RO [DP バス] R]_k [PP [PlaceP [REGP t_k [REG 前]]]_j [#P 3 メートル t_j #] [Place ところ]]_i [P に]]]
 RO「バス」は、REGP 内に基底生成された後、REGP 外へと移動し、さらに REGP は「ところ」の指定部へと移動する。また、空間上の参照点である RO の主要部 R は「から」として随意的に顕在化する。ベクトル空間意味論(Zwarts 1997, Zwarts and Winter 2000)に基づく、(14a)では、参照物 RO「バス」の REG「前」からベクトルが伸び、3 メートル先の地点に「ケン」を位置付けている。つまり、ベクトルの起点としての R を明示的に表示すると「から」となる。

(13)の#P 内の一致による NP の削除同様、MP を含む後置詞句では、#と MP との一致により REGP の削除が認可され、削除された REGP は「ところ」の指定部へと移動する。削除例を(15b)に、その構造を(16)に示す。なお、RO の主要部である REG が削除されることにより、属格の「の」が認可されないため、R「から」が顕在化する必要がある。

(15) a. ケンがバスから前 3 メートルのところに座っているが、

b. リナはバスから 5 メートルのところに座っている。

(16) [[RO [DP バス] [R から]]_k [PP [PlaceP ~~[REGP t_k [REG 前]]]~~_j [#P 5 メートル t_j #] [Place ところ]]_i [P に]]]
 一方で、REGP の移動を駆動する「ところ」の不在により削除後の REGP が移動しない場合、非文法的であることが予測できる。(17)にその例を示す。

(17) a. ケンはバスから 3 メートル前に座っているが、

b. *リナはバスから 5 メートルに座っている。

(17b)の非文法性が示すとおり、予測通りの結果となった。

参考文献

- Ayano, S. 2001. *The internal structure and external syntax of PP*. Ph.D. dissertation, University of Durham; Johnson, K. 2001. What VP ellipsis can do, and what it can't, but not why. In *The handbook of contemporary syntactic theory*, ed. by M. Baltin and C. Collins, pp. 439-479. Oxford: Blackwell; Svenonius, P. 2006. The emergence of Axial Parts. *Nordlyd, Tromsø Working Papers on Language & Linguistics* 33. 49-77.
 Watanabe, A. 2009. Measure phrases in PP. In *The Proceedings of the Tenth Tokyo Conference on Psycholinguistics*, ed. by Y. Otsu, pp. 1-25. Tokyo: Hituzi; Watanabe, A. 2010. Notes on nominal ellipsis and the nature of *no* and classifiers in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 19. 61-74; Zwarts, J. 1997. Vectors as relative positions: A compositional semantics of modified PPs. *Journal of Semantics* 14. 57-86; Zwarts, J, and Y. Winter. 2000. Vector space semantics: A model-theoretic analysis of locative prepositions. *Journal of Logic, Language, and Information* 9. 169-211.

形容詞的タ形動詞の状態解釈：Allosemy に基づく分析

秋本 隆之

工学院大学

問題の所在: 日本語には、(1) に例示されるように、「状態」あるいは「形容詞的用法」と呼ばれる「タ」がある（金水 1994；Kusumoto 2001 など; cf. 寺村 1984）。

(1) 曲がった道、乾いたタオル、痩せた人

これらの「形容詞的タ形動詞」は、過去の変化事象を必ずしも含意しない。述定形の「道が曲がった」が過去の変化事象を含意するのに対し、「曲がった道」では発話時点で「曲がった」状態が成り立てばよい。本発表は、「形容詞的タ形動詞において、なぜ変化事象が消失し、純粋な状態解釈が得られるのか」を出発点とし、分散形態論の (Contextual) Allosemy (Wood 2023) に基づく分析を提案する。

Allosemy: 近年 Wood (2023) により精緻化されている Allosemy を導入する。分散形態論では、 $T_{[+past]}$ は -ed, -t, -Ø といった表出形に対応づけられ、その選択は局所関係にある語根 (Root) によって決定される (Contextual Allomorphy)。Allosemy はその意味論側の概念であり、ある終端節点が複数の意味をもち、局所的文脈に応じて具現的に決定される。Wood (2023) は英語・アイスランド語の動詞派生名詞化にこれを適用したが、本発表で鍵となるのは、動詞化辞 v が event の解釈だけでなく、意味的に空 ($\emptyset$) すなわち恒等関数 (identity function) の解釈をも持ちうる点である。

提案: 形容詞的タ形動詞は、(2) の構造をもち、状態の「タ」として具現する Asp_{stat} は、状態を存在量化して個体を取る (3) の意味をもつと提案する。

(2) $[[\sqrt{ROOT} \ v] \ Asp_{state}(ta)]$

(3) $[Asp_{state}] \rightsquigarrow \lambda P_{\langle e, \langle s, t \rangle \rangle} . \lambda x . \exists s . P(x)(s)$

v はデフォルトでは (4a) のように変化事象を導入するが、 Asp_{state} が局所領域にある場合は、補部の意味をそのまま返す恒等関数 (4b) として具現する。

(4) a. $[v] \rightsquigarrow \lambda P_{\langle s, t \rangle} . \lambda e . \exists s . CAUSE(e, s) \wedge P(s)$

b. $[v] \rightsquigarrow \lambda P . P / __ Asp_{state}$

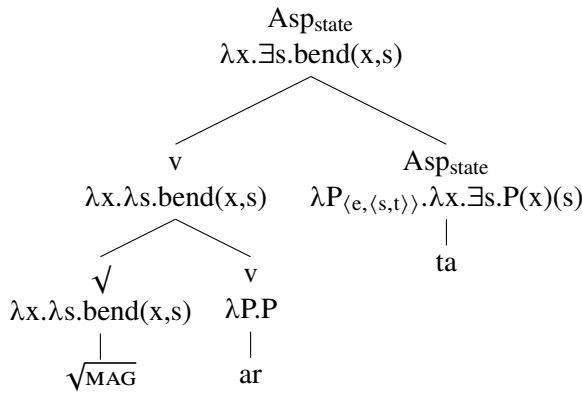


図 1: 曲がった道の構造と意味

本提案では、「曲がった道」は、図 1 のように派生される。 $\sqrt{\text{MAG}}$ は状態の意味をもち、恒等関数の v を経てもこの意味が保たれ、 Asp が存在量化する。「道」を取れば、 $\exists s.\text{bend}(\text{road},s)$ となり、過去の変化事象を含まない純粋な状態述語が得られる。この分析は、「走った人」が状態解釈をもたない理由も導く。 hasir- のような動作動詞には、状態の意味がそもそも

もないため、 Asp が要求する状態述語を型として満たせない。

Root Allosemy: 形容詞的タ形動詞には、対応する述定式とは語根の意味が異なると思われるものがいくつか存在する。例えば「(あの人は) 変わった」は change の意味になるが、「変わった人 (がいる)」の場合は strange のような意味になる。この他には、「太った (人) ($\text{gain weight vs. fat}$)」、「痩せた (人) ($\text{lose weight vs. skinny}$)」、「決まった (場所) ($\text{be settled vs. regular/usual}$)」などがある。本発表は、これらを Root Allosemy として捉える。(2) では $\sqrt{\text{ROOT}}$ と $\text{Asp}_{\text{state}}$ の間に v が介在するが、意味的に恒等関数 ($\emptyset$) であるため、両者は意味の具現において、局所的な関係に入る。形容詞的解釈は、この局所性が許す語根の Allosemy に帰着する。例えば、 $\sqrt{\text{KAW}}$ は、通常のコンテキストでは、「変化した状態 (changed-state)」の意味 (5a) をもち、 $\text{Asp}_{\text{state}}$ と局所関係にある場合は形容名詞「変な」と同様に strange の意味 (5b) が具現される。

- (5) a. $\llbracket \sqrt{\text{KAW}} \rrbracket \rightsquigarrow \lambda s.\text{changed-state}(s)$
 b. $\llbracket \sqrt{\text{KAW}} \rrbracket \rightsquigarrow \lambda s.\text{strange}(s) / \text{--- Asp}_{\text{state}}$

以上より、本分析では、 v の恒等関数化という単一の機構が、変化含意の消失 (v -Allosemy) と語根の意味交替 (Root Allosemy) を同時に導く。なお、他動詞由来の「着物を着た人／人が着物を着た」(wear vs. put on) も同様の交替を示し、 wear が語根の素の状態を、 put on が v による事象化を反映すると分析できる。この方向は、テイル形を無標とする状態動詞 (例：似ている) や、形容詞と動詞的状态述語の異同にも示唆を持つ。これらの拡張は今後の課題とする。

参考文献

金水 敏. 1994. 「連体修飾の「～タ」について」田窪行徳 (編) 『日本語の名詞修飾表現』, 29–65. 東京：くろしお出版.

Kusumoto, Kiyomi. 2001. The semantics of Non-past *ta*. In *Proceedings of the 3rd Formal Approaches to Japanese Linguistics*, 163–180. MIT Working Papers in Linguistics.

寺村 秀夫. 1984. 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 東京：くろしお出版.

Wood, Jim. 2023. *Icelandic nominalizations and allosemy*. Oxford University Press